

## 日本における情緒応答性研究の動向と課題

金平 希<sup>1</sup>・諏訪 絵里子<sup>2</sup>・堤 俊彦<sup>3</sup>・谷本 智佳<sup>4</sup>・辻 圭位子<sup>5</sup>

(<sup>1</sup>心理学科 <sup>2</sup>目白大学心理学部 <sup>3</sup>大阪人間科学大学人間科学部

<sup>4</sup>保健管理センター <sup>5</sup>県立広島大学保健福祉学部附属診療センター)

本研究の目的は、日本における情緒応答性 (Emotional Availability ; 以降 EA) について先行研究を概観し、今後の EA に関する研究の動向を明らかにすることであった。CiNii を用いて、「Emotional Availability」、「情緒応答性」をキーワードとして得られた 2020 年 12 月までの研究のうち、23 研究をレビューした。EA の評価方法については、主に 2 つの方法が用いられており、日本版 I FEEL Pictures (以降 JIFP) を用いて乳幼児の表情認知から大人側の EA を評価する方法と、Emotional Availability Scale (以降 EAS) を用いて親子相互作用場面の観察から親子双方の EA を評価する方法であった。特に、JIFP は半数以上の 14 本で用いられており、EAS は 6 本と少なかった。また、対象者は、定型発達乳幼児の母親あるいは母子を対象としたものが多く、男性や父親は少なかった。さらに、発達障害児とその母親を対象とした研究は 1 本のみであった。EA の関連要因については、母親の抑うつ傾向、養育態度、育児ストレスや子どもの性別、年齢、気質、発達状況、問題行動など様々であった。今後日本の EA 研究は、EAS により、父親や障害児などを対象とし、相互作用の特徴を評価した研究の発展が望まれる。

【キーワード Emotional Availability (EA) 情緒応答性 レビュー】

発達早期の子どもにとって、親との健全なやりとりは重要である。特に母子間の相互作用は、子どもの愛着形成をはじめ、情動調整や認知発達など様々な側面に影響を及ぼすといわれている。一方で、健全な母子相互作用が子どもの障害など何らかの理由で阻害されやすい場合、子どもの反応の乏しさ、特殊性から母親の侵襲的な関わりや攻撃的な関わりが高まるといった悪循環が予測される。このことから、母子の相互作用に注目し、その特徴や傾向を捉えることは、母子関係への支援を考える上でも非常に重要なことであるといえよう。

母子の相互作用を評価する視点の一つに、情緒応答性 (Emotional Availability ; 以下 EA) がある。EA とは情緒的に健康な関係を維持する母子の能力として定義されている (Biringen, Derscheid, Vliegen, Closson, & Easterbrooks, 2014)。もともと EA は、安定した愛着形成における母親の態度や存在のあり方として、単に身体的に存在するだけでなく (Physical availability)、相手の情緒表現に気づき、適切に反応し、自身の情緒表現を情報として提供するといった情緒的な応答 (Emotional Availability) の重要性を強調したものである (Score & Emde, 1981)。その後、子どもの情緒的な応答も、母親の関わりが適切であったかどうかを保証し、報酬を与えるフィードバックシステムの一部であるという事実から、両者がそれぞれ相手の情緒反応に関与するという視点を重視することとなった (Emde & Score, 1988)。そのため現在では、母子が互いに情緒を表出し、相手に十分かつ適切に反応することが、さらに相手の情緒と反応を引き出し、持続した快感情の共有を可能にするため (Biringen & Robinson, 1991)、母親から子どもに向けた EA だけでなく、子どもから母親に向けた EA も評価の対象となっている。これまでの母子の相互作用を測定する尺度の多くが、身体接触や声のトーン、アイコンタクトなど、量的に測定可能な側面を

中心に評価していたのに対し、EA は相互作用にみられる温かさや、心地よさ、場面に対する適切さといった質的なものにも着目する。このことから、母子の相互作用の質的・量的な適切さを直接評価するためには、EA という視点から考えることが妥当であると考ええる。

EA に関する研究は、海外ではすでに多くなされており、定型発達だけでなく、自閉スペクトラム症（Autism Spectrum Disorder ; 以下 ASD）や知的障害など、障害のある子どもにも適応されている。これらの結果では、子どもの発達状況が子どもの EA に関連することや（Gul et al., 2016）、ASD 児は定型発達児と比較し、EA の一部が低い（Van I Jzendoorn et al., 2007）ことなどが示唆されている。また、EA の視点に基づいた介入もなされている（Baker, Biringen, Meyer-Parsons, & Schneider, 2015 ; Mc Connell et al., 2020）。

日本では海外に比べ、EA に焦点を当てた研究は少ないものの、近年徐々に増加傾向にある。そこで本研究では、日本における EA について先行研究を概観し、課題について考察することで、今後の研究の動向を明らかにすることを目的とする。

## 研究方法

本研究で対象とする文献は、学会誌論文、大学紀要、それに準じる主要な論文とした。検索には、CiNii を用いて、「Emotional Availability」あるいは「情緒応答性」をキーワードにして検索した（最終アクセス：2020 年 12 月 19 日）。「Emotional Availability」では 80 本、「情緒応答性」では 40 本の該当があった。そのうち、重複する文献は 1 つにまとめ、ポスター発表や特集、総説論文を除外した。さらに、検索キーワードでは該当しなかったが、明らかに「Emotional Availability」や「情緒応答性」研究に関連する論文を加えた。最後に、研究を精読し、最終的には 23 本を分析対象とした。

## 結果

対象研究の 23 本について、内容別に原著者および年代、対象者、方法・内容、結果のデータを抽出し、EA の測定方法、対象者、EA の関連要因とその結果について整理した（Table1）。

Table1 文献レビューの対象研究一覧

論文 (年)	対象 (N)	方法・内容	結果
小田 他 (2020)	大学および大学院生 46名	質問紙；乳幼児との接触経験の時期、乳幼児との接触感情尺度（扇原他，2016），養護性尺度（中西他，1996），愛着スタイル尺度（中尾他，2004 a）を使用。 JIPP（井上他，1990）；大学・大学院生のEA評価。	養護性とEAの関連について，養護性の高低により，乳幼児の表情の読み取り方が異なり，養護性の高い人は，低い人よりも，幼児の曖昧な表情から，情緒的相互作用を含む様々な関わりを養育者に対して求めていると読み取る傾向が高かった。
金平 他 (2019)	これまでにASDやADHDなど発達障害特性を指摘され，療育を受けている4～6歳児とその母親10組。比較対象群として，4～5歳児の定型発達の子11組。	検査；PVT-R（上野他，2008）。 質問紙；CBCL（井潤他，2001），KIDS（三宅他，1991），CHEDY（尾崎他，2014）。 観察；約30分の母子の相互作用場面（①禁止課題②自由遊び ③母子分離 ④片付けおよび設定遊び⑤おやつ）を撮影し，Emotional availability Scale 4th（Bringen, 2008）に基づき，母親のEA（sensitivity, structuring, nonintrusiveness, nonhostility），子どものEA（responsiveness to parent, involvement with parent）を評価。	発達障害群と定型発達群の母子のEAを比較した結果，母親のnonhostilityのみ有意差が見られ，発達障害群が定型発達群より低かった。これより，発達障害児の母親は，子どもに対して攻撃的な情緒を表出しやすいものの，子どものサインに敏感に反応したり，その場を構造化したり，干渉しすぎないことは定型発達児の母親と同様に行っていた。一方，発達障害児の多動や衝動性といった障害特性や問題行動が，母親に対する反応の悪さという点で，母子間家に影響を及ぼしている可能性が示唆された。
岩田 他 (2013)	初産婦8例，経産婦23例	観察；産後3カ月時点で，母子の分離・再会場面を9分間撮影。佐藤他（2003）に基づき，母子相互作用場面の母親のEA（Ⅰ感受性・感受性，Ⅱ情緒的側面，Ⅲ行動・かかわり），乳児の反応（Ⅰ情緒的側面，Ⅱ行動・かかわり）を評価。 JIPP（JIPP）；母親のEAの評価。	JIPPを用いた母親の情緒読み取り特性は，行動観察から得られた母子相互作用評価の傾向と一貫した特徴を示した。妊娠後期の妊婦のJIPP反応で，「対象希求」や「生理」を多く読み取る群は，少ない群と比較し，生後3カ月時の観察による母子相互作用得点が有意に高かった。また，生後3カ月時のJIPP反応で，「欲求」を多く読み取る母親のEAは低く，「生理」を多く読み取る母親は高かった。
神谷 (2013)	6～7カ月児を持つ 母親59名	質問紙；育児ストレス JIPP；母親のEAの評価。	育児ストレスの高い群の母親は，乳幼児の否定的な感情（怒り）を受容し，その感情・情緒に応じたかわりが難しいことが示唆された。
金城 (2012)	2～5歳の定型発達児の 母親22名	質問紙；母親の育児効力感尺度（田坂，2003）。 JIPP；母親のEAの評価。	JIPPの「あいまいな表情」に感情を強く読み取る母親の方が，そうでない母親よりも子どもを自己統制させる自信が低かった。一方，「思考」を読み取る母親は，「子どもを安堵させる自信」に関する効力感が高い傾向が示された。
Suwa et al. (2012)	4～5歳の未就学児と その母親21組	観察；母子の相互作用場面（①Do-not-touch task ②free play ③clean up ④snack time）を一定の長さ撮影し，Emotional availability Scale 4th（Bringen, 2008）に基づき，母親のEA（sensitivity, structuring, nonintrusiveness, nonhostility）を評価。 Story Stem Assessment Profile (SSAP)；愛着体験に基づいた子供の内的表現にアクセスするため，人形遊びを用いた13のストーリーバッテリーを使用。	母親のEAのレベルが高い子どもの群は，低い群と比べて，より親への肯定的な表象を持っていた。これより，母親のEAと子どもの親への表象の間の一貫性が示唆された。
岩田 他 (2010)	30例（初産婦8例， 経産婦22例）	妊娠後期，産後1週間，産後1カ月，産後3カ月の4時期。 質問紙；Zung's Self-rating Depression Scale (SDS)，子どもの気質尺度（奥石，2002）。 観察；産後3カ月に，母子の分離・再会場面を9分間撮影。佐藤他（2003）に基づき，母子相互作用場面の母親のEA（Ⅰ感受性・感受性，Ⅱ情緒的側面，Ⅲ行動・かかわり），乳児の反応（Ⅰ情緒的側面，Ⅱ行動・かかわり）を評価。	産後3か月児に，SDSの得点がカットオフを超えた「3カ月うつ傾向群」は，母子相互作用評価において，母親のEAが低値であった。 また，母親が3カ月時の子どもの気質を「敏感で手がかかる」と認識している場合には，そうでないと感じる母親と比べて母親のEAが低値であった。
林 他 (2010)	1歳以上幼稚園就園 前の第1子を持つ母 親24名のうち，面接 調査への同意が得ら れた9名	質問紙；TK式診断的新親子関係検査（品川他，1972），育児支援質問紙（川井他，2001）の育児困難感評価項目。 面接；被養育経験と育児について半構造化面接を実施。 JIPP；母親のEAの評価。	TK式診断的新親子関係検査の得点から母親自身の過去の親子関係がネガティブかつEAが高い母親群（ネガティブな被養育経験を持ちながら適切な養育行動をすることができる群）は，自身がされて嫌だったこととしたくないことを明確に意識しており，様々な社会的サポートを利用していた。

Table1 文献レビューの対象研究一覧（続き）

論文（年）	対象（N）	方法・内容	結果
岡藤（2009）	第1子妊娠中の女性18名	インタビュー；内省機能を評価するため、佐々木他（2003）の質問内容を参考に、子ども時代の経験についてインタビューを実施。 JIFP；妊婦のEAの評価。	内省機能の高い人は、乳児の表情の読み取りや応答において、偏りや歪曲が見られず、バリエーション豊かな反応ができる可能性が示唆された。一方、内省機能の低い人は、乳児の表情の読み取りや応答において、偏りや歪曲が見られた。
富井 他（2008）	小学4年生78名	「特定乳児と定期的に交流する学習」において、学習の進行にともなう児童の行動変容（学習参加度、乳児とのかかわり方、乳児の成長・発達への理解、学習状況評価、EA）を、ビデオで録画し、評価。 EAについては、児童の対児行動の中の、乳児の情動信号に気付いて応答する行動に着目し、検討。	小学校4年生の乳児との交流学習を分析した結果、児童は乳児に対する行動の中で、乳児の状態を観察し、気持ちを読み取ろうとしていることから、乳児の発達段階に応じた情緒応答的な行動を行っていることが明らかとなった。また、回数を重ねるたびに、児童のEAの発達が示唆された。
岡藤（2008）	第1子妊娠中の女性18名	JIFP；妊婦のEAの評価。	JIFPによる、感情・情緒の読み取りについて、妊婦は、先行研究における母親と同様の結果を示した。応答反応については、妊婦であっても、乳児の表情から快感情を認識した場合には、快感情への働きかけ、身体的な状態を認識した場合には、それにあった世話をしようとする傾向が見られた。
長屋 他（2008）	研究1；0～2歳児の母親64名 研究2；研究1と同様の母親64名、女子大学生51名	研究1；JIFPを用いて、関係性評価カテゴリーを作成。 研究2；JIFPを用いて、母親と女子大学生における各カテゴリーの反応数および図版別反応数を評価。	作成したJIFPの関係性評価カテゴリーの評価について、母親と女子大学生の反応数比較を行った結果、女子大学生は、基本的情動に反応が集中する傾向があるのに対して、母親は多数のカテゴリーに反応が分散する傾向が見られた。また、一貫して母親のほうが、肯定的な情緒を読み取りやすかった。
森山 他（2008）	生後1か月～5か月までの乳児とその両親7組	質問紙；父母の年齢、職業状態、分娩の様子、家事分担。 観察；父と子、母と子がそれぞれ遊んでいる場面を3分間撮影してもらい、Emotional availability Scale (Bringen, Robinson, & Emode, 1998) に基づき、父母のEA (sensitivity, structuring, nonintrusiveness, nonhostility)、子どものEA (responsiveness to parent) を評価。	Structuringのみ母親が父親よりも高かった。父親と母親のEAと子どものEAの関連について、父母ともにStructuringと子どものEAとの間に有意な関連が見られた。また、母親のみ、Sensitivityと子どものEAとの間に有意な関連が見られた。さらに、子どもの月例と母親のSensitivityは関連が見られ、母親は時間とともにSensitivityを増加させていた。
金丸（2007）	80組の母子（子どもの平均年齢；2歳8か月。母親の平均年齢；35歳）	質問紙；母親の抑うつ傾向尺度（加藤，2006）、母親の養育態度及び育児意識の尺度、子どもの気質尺度。 観察；5分間の母子の相互作用場面を撮影し、Emotional availability Scale (Bringen et al, 1998) に基づき、母親のEA (sensitivity, structuring, nonintrusiveness) 子どものEA (responsiveness to parent, involvement with parent) を評価。	母子のEAの下位尺度の高低をもとに、タイプ分類を行ったところ、主に8つのタイプに分類された。また、タイプ間で、母親の抑うつ傾向、育児負担感、拒否的養育態度、および子どもの気質で差異がみられた。
宮本 他（2007）	女子大学、女子短期大学学生40名	質問紙；内的作業モデル尺度（詫摩他，1988）、成人愛着スタイル尺度（中尾他，2004 b）。 JIFP；青年期女子のEAの評価。	安定的な愛着傾向をもつ者は情動的応答性という面では低い傾向にある。あるいは、安定的な愛着傾向をもつほど、乳幼児の表情認知が多様で、柔軟性を持つ可能性がある。また、安定的な愛着傾向であるほど、表情写真に対して快・不快をはっきりと表出する。
會田（2006）	大学生、大学院生34名	質問紙；日本語版Temperament and Character Inventory; TCI（木島他，1996）。 JIFP；大学生および大学院生のEAの評価。	遺伝規定性の高いとされる気質特性は、多くが乳児の表情から読み取る情緒のカテゴリーに影響を与えていた。一方、遺伝規定性の低い発達の特性であるとされる性格特性は、多くがEAの適切性に関連すると考えられる側面に影響を与えている可能性が示唆された。
長屋 他（2005）	生後0か月～24か月の乳幼児の母親120名および、妊娠月齢4か月～9か月の初産の妊婦2名	JIFP；妊婦および母親のEAの評価。	母親群と妊婦群による表情認知を比較した結果、母親群の方が、乳幼児の情緒を快として読み取る傾向が示され、出産後の方が子どもの情緒を肯定的に捉えようとする傾向が確認された。
小原（2005）	0歳～1歳半の子どもを持つ母親118名	JIFP；母親のEAの評価。	母親の抑うつは、育児困難感を高めることが示された。さらに、母親の抑うつは、JIFPでの、母親による子どもの不安感情の読み取りを高め、育児困難感を弱めることが示された。

Table1 文献レビューの対象研究一覧（続き）

論文（年）	対象（N）	方法・内容	結果
長屋 （2005）	0～24カ月児の母親 120名	JIFP；母親のEAの評価。 子どもの人数、性別、年齢について尋ねた。	子どもの人数や性別によって、JIFPに対する母親の情緒読み取りが異なることが明らかとなった。具体的には、娘をもつ母親の方が受動的な情緒の読み取りが多く、息子をもつ母親は、子どもの年齢が高くなるほど、自己主張や肯定的情緒を多く読み取る傾向があった。また、子どもが1人の場合、息子を持つ母親の方が、不満に注意を払う傾向があり、子どもが複数の場合、息子の年齢が高くなると、対象希求が増加し、我慢が減少する傾向が見られた。
小原 （2005）	0歳児を持つ母親78名、1歳児を持つ母親40名	質問紙；育児支援質問紙ミレニアム版（川井他、2000；2001）、母親の情動共感性尺度（加藤他、1980）。 JIFP；母親のEAの評価。	母親の情動共感性とEA、育児困難感の関連は、0歳児と1歳児の母親で違いが見られた。1歳児を持つ母親は、0歳児を持つ母親よりも、情動共感性がEAに及ぼす影響が低い可能性が示唆された。 また、0歳児を持つ母親の育児困難感には、情動共感性が関連していたが、1歳児を持つ母親では、EAが関連していた。
長田 （2004）	生後5カ月～42カ月までの乳幼児を持つ母親54名および女子大学生68名	質問紙；自尊感情尺度（山本、1982）、内的作業モデル尺度、親子関係診断検査。 JIFP；母親のEAの評価。	母親と女子大学生のJIFPの反応を比較した結果、母親は自分と乳児を同一視せながら、的確に乳児の情緒を読み取ることが可能であった。また、母親は乳児の表情から、感情だけでなく、欲求や状態を読み取りやすく、女子大学生は感情自体を読み取ることにとどまっていた。さらに、母親女子大学生ともに、自尊感情の高低により読み取るカテゴリーに相違が見られた。
金丸 他 （2004）	2歳前半の子どもとその母親41組	観察；23分間の母子の相互作用場面（①自由遊び②片付け③自由遊び）を撮影し、Emotional availability Scale（Bringen et al,1998）に基づき、母親のEA（sensitivity, structuring, nonintrusiveness）子どものEA（responsiveness to parent, involvement with parent）を評価。なお、①③は「葛藤外場面」、②は「葛藤場面」とした。また、子どもの不快情動状態をHedonic Tone Scale（Easterbrooks & Emde, 1983）で評価。さらに、母子の情動調整行動の評価のため、情動調整行動カテゴリーを作成し、分類。	2歳児の情動調整プロセスの特徴として、子どもの不快情動変化は、「継続型」「鎮静型」「非表出型」に分類された。「継続型」の子どもは、不快情動の原因を除去する積極的な働きかけを行った。「非表出型」の子どもは、自ら気紛らわしや他の活動を行い、母親は子どもの自発性や能動性に寄り添っていた。「鎮静型」の母親は子どもの不快情動を鎮静するための積極的な働きかけを行い、母親のEAであるsensitivityとstructuringが葛藤場面で高くなった。さらに、葛藤場面及び葛藤外場面での母子のEAが連動することが、葛藤場面での子どもの不快情動のなさに影響する可能性が示された。
金丸 （2001）	2歳前半の子どもとその母親41組	質問紙；日本語版TTS（菅原他、1994）の一部、マッカーサー乳幼児言語発達質問紙2000年版（小椋、2000）の一部を使用。 観察；23分間の母子の相互作用場面（①自由遊び②片付け③自由遊び）を撮影し、Emotional availability Scale（Bringen et al,1998）に基づき、母親のEA（sensitivity, structuring, nonintrusiveness）子どものEA（responsiveness to parent, involvement with parent）を評価。なお、①③は「葛藤外場面」、②は「葛藤場面」とした。	母親のEAについて、葛藤場面および葛藤外場面ともにsensitivityは他の下位要素と関連があった。一方、structuringは、他の下位要素と関連が少なかった。これより、母親のEAの中では、sensitivityが中心要素といえるだろう。一方、母親のEAと子どものEAには関連が見いだせなかった。また、EAが気質や言語発達状態という子ども側の内的要因と一部関連が示された。

## EA の測定方法

EA を測定する方法については、乳幼児の表情写真 30 枚で構成された日本版 I FEEL Pictures（以降 JIFP）を用いて、表情認知から読み取る側の EA を測定したものが 14 本と半数以上であった。また、JIFP に対する反応の分類方法として、従来の情緒カテゴリーだけでなく（井上・濱田・深津・滝口・小此、1990）、養育者が読み取った情緒への応答反応を評価する応答反応カテゴリーや（岡藤、2008）、母子関係の視点から評価する関係性評価カテゴリー（長屋・濱田・井上・深津、2008）などがあった。一

方、Emotional Availability Scale（以降 EAS）を用いて親子相互作用場面の観察から親子の EA（親の EA；「sensitivity：敏感性」、「structuring：構造化」、「non-intrusiveness：非侵入性」、「non-hostility：非攻撃性」、子どもの EA；「responsiveness to mother：子どもの応答性」、「involvement of mother：子どもからの関与の促し」）を測定したものが 6 本あり、そのうち Emotional Availability Scale（Biringen, Robinson, & Emde, 1998）が 4 本、Emotional Availability Scales 4th Edition（Biringen, 2008）が 2 本であった。そのほか、佐藤・坂垣・森岡（2003）が作成した、母子の分離・再会場面から母親の EA（Ⅰ感受性・敏感さ、Ⅱ情緒的側面、Ⅲ行動・関わり）と乳児の反応（Ⅰ情緒的側面、Ⅱ行動・関わり）を測定する尺度を使用したものが 2 本、乳児の情動信号に気付いて応答する行動から EA を測定したものが 1 本であった。

### 対象者

EA を測定する方法ごと（JIFP, EAS, 佐藤他（2003）の尺度、応答行動測定）に対象者を分類した。

JIFP を用いた 14 本のうち、妊婦が 2 本、乳児の母親が 1 本、幼児の母親が 2 本、乳幼児の母親が 3 本、乳幼児の母親および妊婦 1 本、乳幼児の母親および女子大学生 2 本、大学および大学院生が 2 本、女子大学・短期大学生 1 本であった。大学および大学院生の 2 本のみ男性も含まれていたが、それ以外の研究はすべて女性を対象としていた。

EAS を用いた 6 本のうち、乳児とその両親 1 本、幼児とその母親 5 本であった。幼児とその母親のうち 1 本のみ、定型発達ではなく発達障害児とその母親を対象としていた。

佐藤他（2003）が作成した、母子の分離・再会場面から母親の EA と乳児の反応を測定する尺度を使用した 2 本は、ともに乳児とその母親を対象としていた。

乳児の情動信号に気付いて応答する行動から EA を測定したものは、小学生を対象としていた。

### EA の関連要因とその結果

EA を測定する方法ごとに（JIFP, EAS, 佐藤他（2003）の尺度、応答行動測定）、EA の関連要因やそれぞれの研究結果についてまとめた。

JIFP 妊婦を対象とした 2 本では、妊婦の EA について、JIFP を用いて、従来の乳幼児の感情・情緒の読み取りだけでなく、妊婦の応答反応に関してもカテゴリーを作成し、検討していた（岡藤，2008，2009）。円藤（2009）は内省機能と EA の関係を検討しており、内省機能の高い人は、乳児の表情の読み取りや応答において、バリエーション豊かな反応ができる可能性が示唆された。円藤（2008）は妊婦と母親の EA を比較しており、感情・情緒の読み取りについて、妊婦は、子どもを持つ母親と同様の結果を示した。また、応答反応について、妊婦であっても、乳児の表情から快感情を認識した場合には、快感情への働きかけ、身体的な状態を認識した場合には、それにあった世話をしようとする傾向が見られた。

乳児の母親を対象とした神谷（2013）は、育児ストレスと EA の関係を検討しており、育児ストレスの高い母親は、乳幼児の怒りなどといった否定的な感情を受容し、その感情・情緒に応じたかわりが

難しいことが示唆された。

幼児の母親を対象とした2本では、金城（2012）は、育児効力感とEAの関係を検討しており、乳幼児の「あいまいな表情」に感情を強く読み取る母親の方が、そうでない母親よりも子供を自己統制させる自信が低いことが示された。一方、「思考」を読み取る母親は、「子どもを安堵させる自信」に関する効力感が高い傾向が示された。林・横山（2010）は、母親が子供時代の親子関係、現在の育児支援とEAの関係を検討しており、母親自身の過去の親子関係がネガティブかつEAが高い母親群（ネガティブな被養育経験を持ちながら適切な養育行動をすることができる群）では、自身がされて嫌だったこととしたいくないことを明確に意識しており、様々な社会的サポートを利用していた。

乳幼児の母親を対象とした3本では、小原（2005）は、母親の抑うつと育児困難感とEAの関連について検討した。その結果、母親の抑うつは、JIFPでの、母親による子どもの不安感情の読み取りを高めるが、一方で、不安感情の読み取りは、育児困難感を弱めることが示された。これより、抑うつ的な母親において、不安感情を多く読み取ることができる母親は育児困難感が軽減される可能性が示唆された。長屋（2005）は、子どもの性別や数、年齢がJIFPに対する情緒読み取り傾向に与える影響を検討した。その結果、子どもの人数や性別によって、JIFPに対する母親の情緒読み取りが異なり、これらの要因が子どもの内的状態についての母親の認知に影響をすることが明らかになった。小原（2005）は、母親の情動共感性とEAが、育児困難感にどのように関連するのかについて検討した。その結果、0歳児を持つ母親の育児困難感には、情動共感性が関連していたが、1歳児を持つ母親では、EAが関連していた。よって、母親の育児困難感には、母親としての経験を重ねるにつれ、母親要因である情動共感性よりも、母子相互作用から生じるEAが関連要因となる可能性が示唆された。

乳幼児の母親および妊婦を対象とした長屋・辻・古井・深津（2005）は、妊婦と母親を対象に、JIFPを試行し、妊娠・出産・育児によるEAの変化について検討した。その結果、母親群の方が妊婦群と比較して、乳幼児の情緒を快として読み取る傾向が示され、出産後の方が子どもの情緒を肯定的に捉えようとする傾向が確認された。これより、妊婦のEAは発達途上にあるといえるが、一方で、母親は、出産や育児の経験を経て子どもの生理状態や情緒的相互作用に対して敏感に反応するようになることが明らかとなった。

乳幼児の母親および女子大学生を対象とした2本では、長屋・濱田・井上・深津（2008）は、JIFPの反応には、母親と乳幼児の関係性が投影されるという知見から、JIFP反応を関係性の視点から分析することで母子関係の特徴が把握可能と考え、新たに関係性評価カテゴリーを作成し、このカテゴリーを用いて、乳幼児の母親と女子大学生の反応を比較した。その結果、女子大学生は、基本的情動に反応が集中する傾向があるのに対して、母親は多数のカテゴリーに反応が分散する傾向が見られた。また、一貫して母親のほうが、肯定的な情緒を読み取りやすかった。これより、青年期にはEAは未発達であるが、出産後、子どもとの相互作用によって適応的なEAの発達が促進される可能性が示唆された。長田（2004）は、母親と女子大学生のJIFPの反応を比較し、自尊感情、内的作業モデル、親子関係とEAとの関連を検討した。JFIP反応を母親と女子大学生で比較した結果、母親は自分と乳児を同一視させなが

ら、的確に乳児の情緒を読み取ることが可能であることが推測された。また、母親は乳児の表情から、感情だけでなく、欲求や状態を読み取りやすく、女子大生は感情自体を読み取ることにとどまっていた。これより、EA は、乳児との相互作用を通して培われていくものであることが示唆された。さらに、母親女子大生ともに、自尊感情の高低により読み取るカテゴリーに相違が見られ、内的作業モデルのタイプにおける特徴が情緒の読み取りに反映されていることが確認された。

大学および大学院生を対象とした2本では、小田・清水（2020）は、養護性とEAの関連について検討しており、養護性の高い人は、低い人よりも、幼児の曖昧な表情から、情緒的相互作用を含む様々な関わりを養育者に対して求めていると読み取る傾向が高かった。會田（2006）は、個人の持つパーソナリティ特性とEAとの関連について検討を行った。その結果、遺伝規定性の高いとされる気質特性は、多くが乳児の表情から読み取る情緒のカテゴリーに影響を与えており、乳児に投影される情動や情緒の性質に、個人の気質特性が関連している可能性が示唆された。一方、遺伝規定性の低い発達的特性であるとされる性格特性は、情緒信号の読み取りや、幅の広い情緒の読み取り、快方向の情緒を読み取る傾向、乳児と同一化してその情緒を読み取る傾向など、EAの適切性に関連すると考えられる側面に影響を与えている可能性が示唆された。

女子大学・短期大学生を対象とした宮本・安田（2007）は、青年期女子の愛着の内的作業モデルがEAとどのように関係しているか検討した。その結果、安定的な愛着傾向をもつほど、乳幼児の表情認知が多様で、柔軟性を持つ可能性があり、表情写真に対して、快・不快をはっきりと表出することが明らかとなった。

EAS EASを使用した研究6本のうち、EAS（Biringen et al., 1998）の4本では、森山他（2008）は、乳児とその両親の相互作用を観察し、父母と子どものEAを評価し、母親と父親のEAの違いや子どものEAとの関連性について検討していた。その結果、EAのStructuringのみ父母で差が見られ、母親が父親よりも高く、遊びを子どもに合わせて構成していた。また、父親と母親のEAと子どものEAの関連について、父母ともにStructuringと子どものEAとの間に有意な関連が見られた。また、母親のみ、Sensitivityと子どものEAとの間に有意な関連が見られた。また、子どもの月齢と母親のSensitivityは関連が見られ、母親は時間とともにSensitivityを増加させていた。金丸（2007）は、母子のEAの高低により、タイプ分けを行い、母親の抑うつ傾向、母親の養育態度および育児意識、子どもの気質との関連性を検討した。その結果、母子のEAの高低によるタイプ間で、母親の抑うつ傾向、育児負担感、拒否的養育態度、および子どもの気質で差異がみられた。また、金丸・無藤（2004）は、母子のEAと、子どもの不快情動状態、母子の情動調節行動との関連性を検討した。その結果、2歳児の情動調整プロセスの特徴として、子どもの不快情動変化は、「継続型」「鎮静型」「非表出型」に分類され、「鎮静型」の母親は子どもの不快情動を鎮静するための積極的な働きかけを行い、母親の情動利用可能性であるsensitivityとstructuringが葛藤場面で高くなった。葛藤場面及び葛藤外場面での母子のEAが連動することが、葛藤場面での子どもの不快情動のなさに影響する可能性が示された。金丸（2001）は、母子のEAと子どもの気質、言語発達状況との関連性を検討した。母親のEAについて、葛藤場面および葛藤外



場面ともに sensitivity は他の下位要素と関連があったことから、母親の EA の中では、sensitivity が中心要素といえることが明らかとなった。一方、母親の EA と子どもの EA には関連が見いだせなかった。また、EA が気質や言語発達状態という子ども側の内的要因と一部関連が示された。

EAS 4th (Biringen, 2008) 2 本では、金平他 (2019) は、発達障害児の言語発達状況、問題行動、発達状況、発達障害特性と母子の EA との関連を測定していた。発達障害群と定型発達群の母子の EA を比較した結果、母親の non-hostility のみ有意差が見られ、発達障害群が定型発達群より低かった。一方、発達障害児の多動や衝動性といった障害特性や問題行動と子どもの EA の反応性が関係していた。Suwa, Kondo, & Sakai (2012) は、母親の EA と子どもの親への内的作業モデルとの関連を測定し、母親の EA が高い群の子どもは、低い子どもと比べて、親への肯定的な表象を持っていた。

佐藤他 (2003) の尺度 佐藤他 (2003) が作成した母子の分離・再会場面から母親の EA と乳児の反応を測定する尺度を使用した 2 本のうち、岩田・森岡・長屋 (2013) は、JIFP での母親の情緒読み取り特性と、母子相互作用場面の母親の EA と乳児の反応との関連性を検討した。その結果、JIFP を用いた母親の情緒読み取り特性は、行動観察から得られた母子相互作用評価の傾向と一貫した特徴を示していた。岩田・森岡・斉藤 (2010) は、母親の抑うつ、子どもの気質と、母親の EA および乳児の反応との関連性を検討していた。その結果、うつ傾向の母親は、母子相互作用評価において、EA が低値であった。また、母親が子どもの気質を「敏感で手がかかる」と認識している場合には、そうでないと感じる母親と比べて母親の EA が低値であった。

応答行動測定 富井・松村 (2008) は、小学生が乳児と定期的に交流する学習時間を重ねることで、児童が乳児の情動信号に気付いて応答するという EA の発達を検討していた。その結果、児童は乳児の状態を観察し、気持ちを読み取ろうとしていることから、EA の発達が示唆された。

## 考察

本研究の目的は、日本における EA について先行研究を概観し、課題について考察することで、今後の EA に関する研究の動向を明らかにすることであった。そのため、対象研究の 23 本について、EA の測定方法、対象者、EA の関連要因とその結果に整理し、まとめた。

EA の測定方法については、主に 2 つの方法が用いられており、JIFP を用いて乳幼児の表情認知から読み取る側の EA を評価する方法と、EAS を用いて親子相互作用場面の観察から親子双方の EA を評価する方法であった。特に、JIFP は 23 本中半数以上の 14 本で用いられており、日本の EA 研究の多くが JIFP により EA を評価していることが明らかとなった。JIFP は、乳幼児の表情写真から感情や情緒を読み取る側の EA を簡便に把握することが可能である。しかし、写真による固定的な表情から感情や情緒を読み取ることが、母親の EA の把握に妥当かどうかについては十分検証されているとは言えない (會田, 2006 ; 小原, 2005)。また、EA には、情緒の読み取りだけでなく、働きかけも重要となる。さらに、EA が相互作用の双方の情緒を反映するという観点からみると、表情を読み取る側しか被験者にな

っていないため、一方のみの EA の性質の一部についてのみの評価にとどまっており、子ども側の性質は、結果から推測できるが、相互作用的な性質を見るには必ずしも適切ではないとの批判もある（西田，2002）。そのため、JFIP を用いた研究では、従来の養育者の情緒読み取りの特性把握といった情緒カテゴリーに加え、養育者の応答反応についても検討する応答反応カテゴリーや、母子関係性アセスメントツールとしての関係性評価カテゴリーを用いるなど工夫がなされていた。一方で、EAS を用いて親子双方の EA を測定したものは、6 本にとどまっていた。EAS を用いた相互作用の観察は、相互に影響しあう EA の性質を直接的に観察できるため、母子の関係性を描き出すのに最も適切であるとされている（西田，2002）。しかし、EAS の観察による評価では、母親の情緒の読み取りという認知特性が詳細に捉えられないという課題がある（長屋，2005）。また、EAS を使用し、EA を評価するにあたっては、その信頼性を保つため、海外の研修およびトレーニングを受けることが必須となっている。そのため、日本では EAS の評価者が少ないという課題があげられる。このことから、EA の評価については、JFIP や EAS それぞれの課題を考慮しつつ、母子相互作用の特徴を捉える工夫が必要である。

次に、対象者については、多くの研究が女性とくに母親を対象としており、男性や父親を対象としたものは少なかった。EAS を使用し、両親の EA と子どもの EA の関係を検討した森山他（2008）の研究では、父親と母親では EA の質が異なることが示されていた。親子関係の研究分野では圧倒的に父親や男性を対象とした研究が少ないが、近年では父親も子どもとより多く関わるようになってきている。子どもの情動発達における養育環境には、父親の EA の関連性も明らかとなっており、子どもの情動発達が母親だけでなく父親の情動表出による可能性が示唆されていることから（森山他，2008）、今後は父母それぞれの役割を考慮しつつ、父親についてもその特徴を検討する必要がある。また、1 本のみ定型発達ではなく、発達障害児とその母親を対象としていた（金平他，2019）。国内でも、ASD とウィリアム症候群の子どもとその母親の EA について、Suwa, Kawamura, Kanehira, & Tsutsumi（2018）が研究発表を行っており、ASD やウィリアム症候群の子どもとその母親の EA は、定型発達の母子より低く、異なる EA の特徴を持つことが明らかとなっている。特に海外においては、母子相互作用にリスクがある障害を持つ子どもと母親についても、EAS による評価および EA の概念から介入がなされている（Baker, et al., 2015 ; Mc Connell et al., 2020）。さらに、EAS は、母子関係に限定されず、親や里親、さらに子どもの生活における養育の役割を持つ大人（児童福祉の専門家や教師など）と子どもの相互作用の評価にも用いられており、子どもに関わるより幅の広い大人を対象としている。このことから、今後日本でも母子関係に限定せず、父親や専門家など様々な対象に焦点を当てる必要があると思われる。

EA の関連要因とその結果については、JFIP を用いて EA を検討した研究では、乳幼児の感情や情緒を読み取る側の子ども時代の親子関係や愛着の内的作業モデル、パーソナリティ特性、内省機能、情動共感性、自尊感情が関係していることが示唆された。また、母親の抑うつや育児ストレス、育児困難感、育児効力感、現在の育児支援も関係が示された。さらに、子どもの性別や数、年齢も乳幼児の表情認知能力に関係していた。一方、大学生や妊婦といった子育て未経験者と母親の比較から、EA は子どもとの実際の相互作用を通して培われていくものであることが多くの研究で一致していた。また、EAS を用い

てEAを検討した研究では、母子のEAには、母親側の抑うつ傾向や養育態度、育児意識が関連要因として挙げられた。また、子ども側の月齢、気質、発達、言語発達状況、問題行動、発達障害特性、情動状態や母子の情動調節も関係していた。このように、母子のEAには様々な要因との関連性が示唆されていた。こうした母子のEAに影響を与える要因を把握することは、母子関係支援を行ううえで、どのような要因に介入を行えばよいかの示唆にもなるため、重要であると思われる。今後はどの要因がどのようなEAの質に関係するのかについて、より詳細に検討する必要があるだろう。

最後に、日本のEAに関する研究は、主にJIFPを用いて、母親の情動認知を測定した研究が発展してきた。また、JIFPは、情動認知にとどまらず、読み取った情動に対する応答や、それぞれの関係性を測定するための工夫がなされていることが明らかとなった。一方で、EASを使用して、親子の相互作用の観察から双方のEAを評価した研究は少なかった。さらに、障害を持つ子どもとその親を対象としたものは、1本のみであった。特に母子関係にリスクを持つ可能性が高い障害のある子どもとその母親の相互作用への介入を進めていくためには、エビデンスに基づいた評価を行い、支援プログラムの開発が必要である。そのためにも、母子相互作用の強みと弱みを同時に評価することを可能とするEASによる評価が求められる。EASの使用にはライセンスが必要となるため、日本での評価者はまだ少ないが、海外では、質問紙により親と子どもの間のEAに関する親の認識を評価した研究もあり、EASの評価との相関が高いことが示唆されている（Vliegen et al., 2005）。今後は、尺度の日本語版の検証あるいは日本独自の尺度開発が、EAに関する研究で優先されるべき課題かもしれない。

本研究の限界は、主に日本の論文を対象としているため、EA研究を網羅した文研研究とはいえない。実際に、海外でEAについての多く研究がなされており、EAのレビューについてもBiringen et al が2014年に行っている。しかし、それ以降もEA研究は海外で発展しているため、今後は海外のデータベースも含んだ検証が必要である。

## 文献

會田 悠介 (2006). 情緒応答性とパーソナリティ特性 臨床心理学研究, 4, 59-81.

Baker, M., Biringen, Z., Meyer-Parsons, B., & Schneider, A. (2015). EMOTIONAL ATTACHMENT AND EMOTIONAL AVAILABILITY TELE-INTERVENTION FOR ADOPTIVE FAMILIES *Infant Mental Health Journal*, 36, 179-192.

Biringen, Z. (2008). Emotional Availability (EA) Scales Manual 4th edition. Unpublished manuscript.

Biringen, Z., Derscheid, D., Vliegen, N., Closson, L., & Easterbrooks, M.A. (2014). Emotional availability (EA) : Theoretical background, empirical research using the EA Scales, and clinical applications. *Developmental Review*, 34, 114-167.

Biringen, Z., & Robinson, J. (1991). Emotional availability in mother-child interactions: A reconceptualization for research. *American journal of Orthopsychiatry*, 61, 258-271.

- Biringen, Z., Robinson, J. & Emde, R. N. (1998). Emotional Availability Scale. Unpublished manuscript University of Colorado Health Sciences Center.
- Easterbrooks, A., & Emde, R. N. (1983). Hedonic Tone Scale. Unpublished manuscript.
- Emde, R. N., & Sorce, J. F. (1980). The rewards of infancy: Emotional availability and maternal referencing. In Call, J. D., Galenson, E., & Tyson, R. L. (Ed.) *Frontiers of infant psychiatry*: Vol. 2. (pp. 17-30) New York: Basic Books. (エムディ, R.N. ソース, J.F. (1988). 乳幼児からの報酬：情緒応答性と母親参照機能 (生田 憲正, 訳) 小此木 啓吾 (監訳) 乳幼児精神医学 (pp.25-48) 岩崎学術出版社)
- Gul, H., Erol, N., Akin, D.P., Gullu, B. U., Akcakin, M., Alpas, B., & Öner, Ö. (2016). EMOTIONAL AVAILABILITY IN EARLY MOTHER-CHILD INTERACTIONS FOR CHILDREN WITH AUTISM SPECTRUM DISORDERS, OTHER PSYCHIATRIC DISORDERS, AND DEVELOPMENTAL DELAY *Infant Ment Health J.* 3, 151-159.
- 林 裕美・横山 恭子 (2010). ネガティブな被養育経験を持ちながら適切な情緒応答性を示す母親の特性について—負の世代間伝達を断ち切るために— 上智大学心理学年報, 34, 33-42.
- 井上 カーレン 果子・濱田 庸子・深津 千賀子・滝口 俊子・小此 木啓吾 (1990). 乳児の写真から情緒を認知する能力の判定—Japanese IFEEL Picture Test— 家族療法研究, 7, 30-40.
- 井潤 知美・上林 靖子・中田 洋二郎・北 道子・藤井 浩子・倉本 英彦・根岸 敬矩・手塚 光喜・岡田 愛香・名取 宏美 (2001). Child Behavior Checklist/4-18 日本語版の開発. 小児の精神と神経, 41, 243-252.
- 岩田 裕美・森岡 由紀子・長屋 佐和子 (2013). 妊娠後期と産後3カ月時の母親の情緒認知特性と母子相互作用についての検討—乳幼児表情写真 (日本版 IFEEL Pictures) と行動観察を用いて— 乳幼児医学・心理学研究, 22, 43-57.
- 岩田 裕美・森岡 由紀子・斎藤 由紀子 (2010). 出生早期の母子相互作用に影響を及ぼす要因—第2報：母親のうつ状態および子どもの気質 (易刺激性) と母子相互作用について— 母性衛生, 51, 456-464.
- 神谷 美南子 (2013). 育児ストレスと母親の情緒応答性 臨床心理学研究, 11, 93-107.
- 金平 希・諏訪 絵里子・川村 祐未・堤 俊彦・皿谷 陽子・谷本 智佳 (2019). 発達障害児とその母親の母子相互作用場面における情緒応答性 臨床発達心理実践研究, 14, 63-72.
- 金丸 智美 (2001). 2歳児と母親の遊び場面及び片付け場面における emotional availability の様相 人間文化論叢, 4, 321-330.
- 金丸 智美 (2007). Emotional Availability から捉えた母子関係性の個人差 家庭教育研究所紀要, 29, 118-130.
- 金丸 智美・無藤 隆 (2004). 母子相互作用場面における2歳児の情動調整プロセスの個人差 発達心理学研究, 15, 183-194.
- 加藤 邦子 (2006). 母親の抑うつと親子関係・養育態度との関連—エンジンバラうつ尺度を用いて— 家庭教育研究所紀要, 28, 127-137.

- 加藤 隆勝・高木 秀明 (1980). 青年期における情動的共感性の特徴 筑波大学心理学研究, 2, 33-42.
- 川井 尚・庄司 順一・千賀 悠子・加藤 博仁・中村 敬・安藤 朗子・...恒次 欽也 (2000). 育児不安のタイプとその臨床的研究VI: 子ども総研式・育児支援質問紙 (試案) の臨床的有用性に関する研究 日本子ども家庭総合研究所紀要, 36, 117-139.
- 川井 尚・庄司 順一・千賀 悠子・加藤 博仁・安藤 朗子・中村 敬...恒次 欽也 (2001). 育児不安のタイプとその臨床的研究VII: 子ども総研式・育児支援質問紙 (ミレニアム版) の手引きの作成 日本子ども家庭総合研究所紀要, 37, 159-180.
- 金城 志麻 (2012). 幼児期の子どもを育てる母親の情緒応答性と育児自己効力感との関連 琉球大学教育学部紀要, 81, 303-313.
- 木島 伸彦・斎藤 令衣・竹内 美香・吉野 相英・大野 裕・加藤 元一郎・北村 俊則 (1996). Cloningerの気質と性格の7次元モデル及び日本語版 Temperament and Character Inventory (TCI) 精神科診断学, 7, 379-399.
- 興石 薫 (2002). 新生児期から生後 4 ヶ月までの子どもの気質の安定性と母親の育児不安—母親の自己注目傾向の違いから 小児保健研究, 61, 482-488.
- McConnell, M., Closson, L., Closson, B., Wurster, H., Flykt, M., Sarche, M., et al (2020). The “EA brief”: A single session of parent feedback and coaching to improve emotional attachment and emotional availability (EA) *Infant mental health Journal*, 41, 783-792.
- 三宅 和夫 (監修) 大村 政夫・高嶋 正士・山内 茂・橋本 泰子 (編) (1991). KIDS 乳幼児発達スケール<タイプ T> 発達科学研究教育センター
- 宮本 邦雄・安田 藍 (2007). 青年期女子の愛着スタイルと情緒応答性の関連 東海学院大学紀要, 1, 203-201.
- 森山 雅子・小山 里織・安藤 真斗・宮地 志保・丸山 笑里佳・小林 佐知子・長谷川 有香 (2008). 乳児の情動発達と父母の Emotional Availability の関連—遊び場面におけるやりとりの観察データからの分析— 心理発達科学, 55, 201-207.
- 長田 恵津子 (2004). 母親と女子大生における乳児の情緒に対する感受性の相違--日本版 I FEEL Pictures を用いての検討 白百合女子大学発達臨床センター紀要, 8, 37-44.
- 長屋 佐和子 (2005). 乳幼児表情写真 (IFEELPictuers) を用いた母親の情緒応答性の測定: 子どもの性差・人数・年齢が与える影響 発達心理学研究, 16, 156-164.
- 長屋 佐和子・濱田 庸子・井上 果子・深津 千賀子 (2008). 日本版 IFEEL Pictures の研究—関係性評価カテゴリー作成の試み— 精神分析研究, 52, 18-29.
- 長屋 佐和子・辻 佐知子・古井 景・深津 千賀子 (2005). 母親と妊婦の日本版 IFEEL Pictures 反応の比較検討 東海心理学研究, 1, 30-38.
- 中西 由里・栗津 幹子 (1996). 「養護性 (nurturance)」に関する一研究—幼児を持つ母親と未婚大学生の専攻別による比較—椋山女学院大学研究論集 社会科学篇, 27, 9-18.

- 中尾 達馬・加藤 和生 (2004 a). “一般他者”を想定した愛着スタイル尺度の信頼性と妥当性の検討 九州大学心理学研究, 5, 19-27.
- 中尾 達馬・加藤 和生 (2004 b). 成人愛着スタイル尺度 (ECR) の日本語版作成の試み 心理学研究, 75, 154-159.
- 西田 薫 (2002). 情緒応答性の実証的研究に関する一考察 人間文化研究科年報, 18, 223-234.
- 小田 穂香・清水 寿代 (2020). 愛着と乳幼児との接触時感情が養護性に与える影響 —情緒応答性の関連の検討— 幼年教育研究年俵, 42, 47-55.
- 小椋 たみ子 (2000). マッカーサー乳幼児言語発達質問紙の標準化 平成 10 年度～11 年度科学研究費補助金研究成果報告書
- 小原 倫子 (2005). 母親の抑うつおよび情緒応答性と育児困難感との関連 小児保健研究, 64, 570-576.
- 小原 倫子 (2005). 母親の情動共感性及び情緒応答性と育児困難感との関連 発達心理学研究, 16, 92-102.
- 岡藤 円春 (2009). 妊婦の内省機能と情緒応答性の関連 —インタビューと日本版 IFEEL Pictures を用いて— 日本女子大学大学院人間社会研究科紀要, 15, 171-188.
- 岡藤 円春 (2008). 妊娠中の女性の情緒応答性の検討 —日本版 IFEEL Pictures における応答反応カテゴリー作成の試み— 日本女子大学大学院人間社会研究科紀要, 14, 163-179.
- 扇原 貴志・上村 佳世子 (2018). 大学生における子どもへの関心の諸要因—乳幼児との接触経験・内的作業モデル・他者意識の影響— 応用心理学研究, 43 (3), 256-266.
- 尾崎 康子・小林 真・阿部 美穂・芝田 征司・斉藤 正典 (2014). CHEDY Checklist for Developmental Disabilities in Young Children : 保育者のための幼児用発達障害チェックリスト 解説書 文教資料協会
- 佐々木 靖子・瀬地山 葉矢・本城 秀次 (2003). Adult Attachment Interview に関する予備的検討—日本の妊婦と成年女子の比較から 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要 心理発達科学, 50, 195-205.
- 佐藤 文・坂垣 由紀子・森岡 由起子 (2003). 産後のうつ病と母子相互作用についての縦断的研究 (その 2) 産後のうつ病が母子相互作用に及ぼす影響について 母性衛生, 44, 221-230.
- 品川 不二子・品川 孝子・森上 史郎・河井 芳文 (1972). TK 式診断的新親子関係検査手引き
- Sorce, J. F., & Emde, R. N. (1981). Mother's presence is not enough : Effect of emotional availability on infant exploration *Developmental Psychology*, 17, 737-745.
- 菅原 ますみ・島 悟・戸田 まり・佐藤 達哉・北村 俊則 (1994). 乳幼児期にみられる行動特徴—日本版 RITQ および TTS の検討 教育心理学研究, 42, 72-80.
- Suwa, E., Kawamura, U., Kanehira, K., & Tsutsumi, T. (2018). Mother- Child Relationship in Williams Syndrome - The comparison to the case of Autistic and normal children The 16th WAIM (World Association for Infant Mental Health) (Rome, Italy) .

- Suwa, E., Kondo-Ikemura, K., & Sakai, S. (2012). Can Preschoolers' Narratives Reflect Their Mothers' Emotional Availability? *Journal of Brain Science*, 38, 6-20.
- 詫摩 武俊・戸田 弘二 (1988). 愛着理論からみた青年の対人関係—成人版愛着スタイル尺度の試み—  
東京都立大学学報, 196, 1-16.
- 田坂 一子 (2003). 育児自己効力感 (parenting self-efficacy) 尺度の作成 甲南女子大学大学院論集創刊号  
人間科学研究編, 1-10.
- 富井 和美・松村 京子 (2008). 乳児との定期的交流学習による児童の情緒応答性の発達 教育実践学研  
究, 10, 92-102.
- 上野 一彦・名越 斉子・小貫 悟 (2008). PVT-R 絵画語い発達検査 日本文化科学社
- Van IJzendoorn, M. H., Rutgers, A. H., Bakermans-Kranenburg, M. J. Swinkels, S. N., • Van Daalen, E., Dietz, C.,  
et al (2007). Parental Sensitivity and Attachment in Children With Autism Spectrum Disorder:  
Comparison With Children With Mental Retardation, With Language Delays, and With Typical Development  
*Child Development*, 78, (2), 597–608.
- Vliegen, N., Bijttebier, P., Boulpaep, N., Luyten, P., Cluckers, G., & Biringen, Z. (2005). De EA-SR: Een  
zelfrapporteringsschaal voor het meten van emotionele beschikbaarheid bij ouders van jonge kinderen (0-  
1jaar). [The EA-SR: A parental self report scale measuring emotional availability in interaction with infants  
(0-1 year).] *Diagnostiekwijzer*, 8, 137–147.
- 山本 真理子・松井 豊・山成 由紀子 (1982). 認知された自己の諸側面の構造 教育心理学研究, 30, 64-  
68.

## Trends and Issues in Emotional Availability Research in Japan

Nozomi KANEHIRA, Eriko SUWA, Toshihiko TUTUMI,

Chika TANIMOTO, Keiko TUJI

Trends and issues in Emotional Availability research in Japan The purpose of this study was to review previous studies on emotional Availability in Japan and clarify future trends in EA research. Using CiNii, we reviewed 23 of the studies up to December 2020 obtained with the keywords "Emotional Availability" and "情緒応答性". Two main methods are used to evaluate EA. The Japanese version of I FEEL Pictures (JIFP) is used to evaluate EA by facial expression recognition of infants from adult's side, and the Emotional Availability Scale (EAS) is used. It was a method to evaluate the EA of both parents and children by observing the scene of parent-child interaction. In particular, JIFP was used in more than half of the 23 cases, and EAS was used in as few as 6 cases. In addition, most of the subjects were mothers or mothers and infants with typical development, and there were few men and fathers. In addition, there was only one study of children with developmental disabilities and their mothers. There were various factors related to EA, such as the mother's depressive tendency, child-rearing attitude, childrearing stress, the child's gender and age, temperament, developmental status, and problem behavior. In the future, it is hoped that EA research in Japan will be developed by using EAS, targeting fathers, children with disabilities, etc., and evaluating the characteristics of interactions.

【Key words : Emotional Availability (EA), Review】